日本科学者会議（JSA）滋賀支部

NEWS　LETTER

2020年5月8日発行　第55号
事務局長　水原　渉
TEL/FAX　0749-47-5169（共通）
go-ma-me@hi3.enjoy.ne.jp

事務局長連絡

・4月26日幹事会はMLで行い、現在、とりまとめ中。
・5月予定の滋賀支部第52回大会は現段階で、延期。

【活動報告】2019年度教育のつどい「生きる力と学び」
― 分科会のめざすもの ―

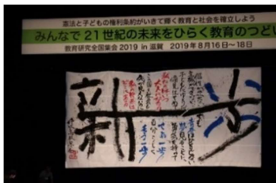
個人会員分会　山上修（滋賀民研）

１月 26 日開催された滋賀教育のつどいで、大学関係の方も視野に入れた分科会が「生きる力と学び～生活科・総合学習・大学教育」分科会です。学びとは何か、生きる力とは何かを追求しています。子ども自身が、興味や疑問をもち、解決を求める過程において、主体的に生きる力が育まれる。その過程で生まれる知りたい意欲が学ぶ意欲となる。このような場をどのように創造し、広げていけばよいかを追究しています。

分科会報告

「生きる力と学び～生活科・総合学習・大学教育」

個人会員分会　田中成幸



参加者：11名
小学校、中学校教員各１名。
高校教員３名。高校生３名。
退職教員、市民、記者。

分科会への問題提起： 共同研究者　山上修

PISA などの国際学力調査で、日本は、なぜ 15 歳の「学力」は上位で、大人になれば下位になるのだろか？それは、学校での勉強が、「基礎から応用、その上で生きる力を育てるという段階論」と「競争とテスト」が主流だからではないか。「段階論」や「競争とテスト」による勉強は、大人の論理と外的な学習動機づけによっているため、子どもの内的な学習意欲が生まれない。学習意欲を、テストなど外的動機に拠らず、子どもの興味・関心という内的動機に依拠してこそ、大人になっても剥落しない生きる力となって働くのではないか。大事なことは、いかに子どもの興味・関心を呼び起こすのか、という学びの工夫ではないか。

報告１「オレの話聞いてえや」　（A小学校　K先生）

K君という落ち着きのない児童に対して、６年担任の先生が気持ちを文章に表現させたり、じっくり話を聞きながら、少しずつではあるが落ち着いていく様子をレポートされた。９月の運動会では、低学年のころからダンス練習が苦手だったK君が応援団のリーダーに立候補し、周りからの不安を乗り越えて、旗振り役などの仕事をきちんとこなし、応援リーダーをやり遂げた。学習面でもすぐに放り投げるところもあったが、だんだん丁寧な関わりや支援で最後まで課題をやり切った。周りからはわがままで乱暴者ととらわれがちなK君だが、「弱いものが大切にされない」というアンテナには敏感で、人権学習の感想文では、「かわいそう」「おかしい」「悲しくなった」と素直に気持ちを表現する。このような積み重ねの中で、感じたことについて３点あげられた。

○　どんな子どもも願いを持っており、それをわかり励まそうとする存在がいて、子どもがそれを感じとることの大切さ。
○　困ったら誰かに頼ったら、誰かが助けてくれるその経験の積み重ねは大きい。
○　子どもの言動には必ず理由がある。そこを丁寧に読み取ること、子どもの声を聞くことがスタートであり、そこに希望がある。

報告２「“主体的な学び”をはぐくむ数学の授業づくり」

（A中学校　S先生）

Ｓ先生は「数学嫌い」「数学への苦手意識」を克服してほしいと、３～４人のグループ学習で、生徒が主体的に参加できる授業づくりをめざしている。ベル着や持ち物などの基本的な授業規律を指導し、学級すべての生徒の基礎・基本となる学力の定着をめざすことを目標に、生徒の答えに対して「なぜそのように考えたのか？」を問い返す場面を増やし、発表させる。さらに考え方の道すじを黒板に書いて視覚化している。

２年生の「確率」の授業では、グループ単位で「当選確率は低いが当選すれば景品が高額であるくじ」と「当選確率は高いが景品は低額であるくじ」のどちら

を選択するか、また選択した理由も話し合わせた。

このとりくみで、以前に比べ生徒たちの授業参加への意識が変わり、意欲的に努力する姿が見られるようになった。グループ内での質問や考え方の交流、それでも難しいときは教師を呼んで質問することが増えてきている。一方で課題として基礎基本的な学習内容の定着のために演習時間を増やし、家庭学習の定着が重要であるということや、小テストの実施や家庭学習の課題を示すなどの手だてをとっていくことがあげられた。またしっかり考え意見を言える生徒はまだ少数で、すべての生徒が考える力を育むことができるような工夫が必要である。

報告3「演劇部で見つけた本当の私」（O高校　Hさん）

Hさんは小さいころ両親の離婚を経験し、「自分は父親から捨てられた」と父親に対して憎しみを抱いていた。高校に入って演劇部に入部、そこで演劇部の活動や顧問の先生との出会いを通して「本当のわたし」に出会っていく。まず演劇部のモットー「舞台で全力で遊ぶ」がとても良い。舞台という場を使って全力で遊ぶ、その遊びの中から新しい発想や表現が生まれる。芸術活動は評価されるために行うものではなく、自由な発想で「どんなことができるか」追求していくものである。そのうえでどんなに時間がかかってもよいから、「よいもの」に触れ吸収し、みんなにシェアしていこうという宿題が課せられる。個々の自由を尊重する顧問の先生の姿勢が伺える。全私研では、一高校生の意見を真剣になって聴いてくれる大人の存在を知った。運営する側にも携わったことで、自分でも大きなことに関われると実感し、声を上げることができた。湖東湖南ブロック大会で上演した劇のうち『荒れた部屋』の脚本を担当し、「愛されている」という実感を持つことができた。部活での「学び」をとおして、「人に迷惑をかけない」とよく言われていることばを乗り越えて、何かしようとしたとき、ブレーキをかけようとする「社会」の存在に気がついた。

活動での気づきの中で、父親に対する考え方も変わり、「父にもいろんな事情があったのでは」と考え、父親を赦すことができるようになった。たくさんの人と出会い、違いを認め合い、他者を理解することを通して、自身をより理解できるのではないか。人を赦すことは自分自身を赦すことにつながっていく。気づきを与えてくれるのは、人とのつながりであり、人とつながることが、世の中を変えることにつながる。

全体討論：３本のレポートをとおして、「自己肯定感」について深い討論が行われた。生きる力をつけるのは、「自己肯定感」を持つことが大切であるが、それはどのように育まれるのだろうか。

○「自己肯定感」は励まされたり、褒められたりして育まれるが、最も重要なことは自分の思いをしっかり聴いて受け止めてくれる人の存在である。K君は担任の先生に素直な気持ちを表現できるようになり、学級の中でいろいろな活動に取り組めるようになった。ただこのような先生の存在が常にあるとは限らない。K君の場合も中学進学後が課題となろう。

○　失敗経験が大切である。最近は子どもに失敗をさせないように周りがフォローするケースもあるが、失敗経験を重ねて内的動機が喚起され、興味関心が広がり自ら解決する力が育まれる。こうして得た力は一生の宝物となり、ずっと身についていく。

○　Hさんは内的動機づけのためには気づきが必要で、それは人とのつながりから与えられると書いた。S先生も人とのつながりから与えられる気づきから学びへの興味を喚起し、それを他者に表現できる力をつけようとされている。

○　Hさんは「私は少し前まで褒められるのが怖かった。それは褒められなくなるのが怖かったから」と書いている。他人と比べられると、どうしても知らないうちに期待に応えなければという思いの強さに押しつぶされそうになる。K君もそうだが、敏感に周りをとらえる子どもほど情報を必要以上に受け取って押しつぶされそうになり、うまく話すことができなかったり動けなかったりして「自己肯定感」が育たなくなる。他人と比較されると劣等感にさいなまれる。褒められなくなる恐怖を取り除くのは、誰か大人から、「ありのままの自分を受け止めてもらう」こと。それによって失敗を恐れない前向きの力が生まれるのではないか。周りの大人の配慮が必要であろう。

○　「闇が深い人ほど、反転すると光を放つ」小さなことに気づく共感力が大人にも子どもにも大切。